

Albert Gleizes



アーティゾン美術館蔵書展示

INFO ROOM

Albert Gleizes

書籍案内

展示書籍のうち、下記1冊のみ、邦訳されています。

1. 『「キュビズム」について』

- アルベール・グレーズ、ジャン・メッツァンジェ『キュビズム』
蘇武緑郎訳、向陵社、1915年

アルベール・グレーズの著作ではほかに下記が邦訳されています。
オリジナルの初版は開催中の展覧会「STEPS AHEAD: Recent Acquisitions」にて展示されています。

- アルベール・グレーズ『キュビズム』(バウハウス叢書13)
貞包博幸訳、中央公論美術出版、2020年

グレーズを主題にとりあげた日本語の書籍はまだありませんが、英語では下記書籍で作家の生涯や作品と著作を体系的に知ることができます。

- Brooke, Peter. *Albert Gleizes: For and Against the Twentieth Century.*
Yale University Press, 2001.

グレーズの著作物を部分的に説明している書籍はいくつかありますが、最近刊行されたものでは下記が挙げられます。

- 松井裕美『キュビズム芸術史：20世紀西洋美術と新しい「現実」』
名古屋大学出版会、2019年

本冊子のテキスト作成にあたり上記を参照しました。

アルベール・グレーズ — 理論書から挿絵本まで

アーティゾン美術館は、キュビズムを代表するフランスの画家アルベール・グレーズ(1881-1953)の《手袋をした女》を2015年に収蔵しました。同作品は現在開催している展覧会「STEPS AHEAD: Recent Acquisitions」の、セクション2「キュビズム」(6階)で初公開されています。1922年頃に描かれた本作は、幾何学的な形の組み合わせで人物が表現された不思議な絵画です。どのような意図で作家はこのような作品を描いたのか、その思考の一端に触れることができる資料を、当館が所蔵する貴重図書コレクションからご紹介いたします。



アルベール・グレーズ
《手袋をした女》1922年頃
油彩・板、92.0×73.0cm
石橋財団アーティゾン美術館蔵

Albert Gleizes
Woman with a Glove, c.1922
Oil on panel, 92.0 x 73.0cm
Artizon Museum, Ishibashi Foundation

アーティゾン美術館蔵書展示

アルベール・グレーズ—理論書から挿絵本まで

会期：2021年2月13日(土)–5月9日(日)

会場：アーティゾン美術館4階 インフォールム

企画・編集・執筆：黒澤美子

印刷：株式会社野毛印刷社

発行：公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館

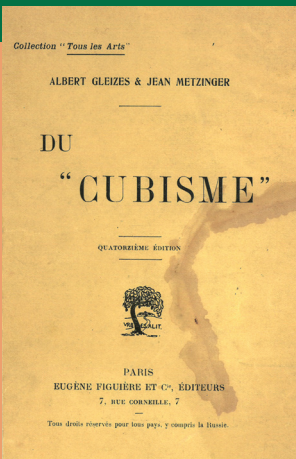
発行日：2021年2月13日

〒104-0031 東京都中央区京橋1-7-2

www.artizon.museum

©2021 Artizon Museum, Ishibashi Foundation

グレーズは、20世紀初頭に起こったキュビズム運動の創生期に重要な役割を果たした画家です。ピカソとブラックから始まったキュビズム運動がバリの芸術家たちへと波及していく1910年代、グレーズも他のキュビズムの作家たちと同様に、新しい芸術運動に身を投じていました。そのなかで彼が特異であったのは、数々の理論書を発表し、キュビズムの技法や思想の言語化に努めたことです。1920年代半ばから30年代にかけては、制作に励むとともに、とくに執筆や講演活動に熱心に取り組みました。今回は代表的な著作、『キュビズムについて』(1912年)、『絵画とその諸法則』(1924年)、そして『オモサントリスム』(1937年)をご紹介します。あわせて彼が版画作品を寄せた挿絵本も展示します。出版物というキャンバス以外のメディアで、キュビズムの確立に貢献した作家の思考の足取りをご紹介します。

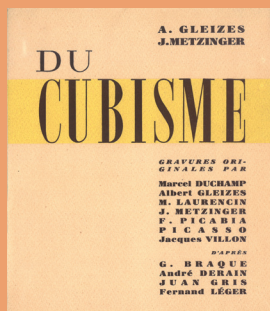


1. アルベール・グレイズ、ジャン・メッツァンジェ『「キュビズム」について』14版、パリ：E. フィギエール、1912年
Gleizes, Albert, and Jean Metzinger. *Du "Cubisme"*. Quatrième édition. Paris: E. Figuière, 1912. 石橋財団アーティゾン美術館蔵



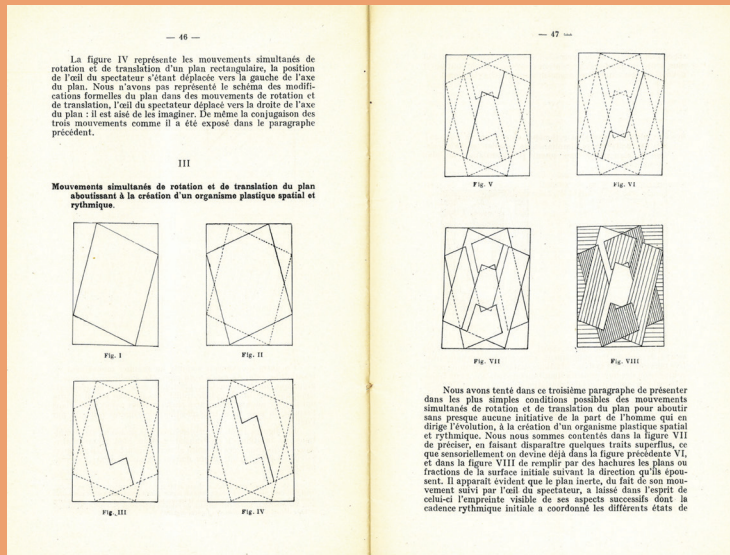
1947年版に挿入されているグレイズの挿絵

本書はグレイズと仲間の画家ジャン・メッツァンジェとの共同執筆によるキュビズム最初期の理論書で、刊行翌年には多数の国々で翻訳されるなど、同時代の作家たちに広く読まれました。本書で彼らは、フランス近代絵画の系譜の最先端にキュビズムを位置づけています。幾何学を応用しながら、絵画空間そのものを追究していく絵画制作の在り方を提示しています。それはキュビズム絵画を抽象化の方向へ導くことになりました。刊行と同年に重版されており、本展で展示しているものは14版になります。



2. アルベール・グレイズ、ジャン・メッツァンジェ『「キュビズム」について』パリ：コンパニー・フランス・デ・ザール・グラフィック、1947年
Gleizes, Albert, and Jean Metzinger. *Du Cubisme*. Paris: Compagnie Française des Arts Graphiques, 1947. 石橋財団アーティゾン美術館蔵

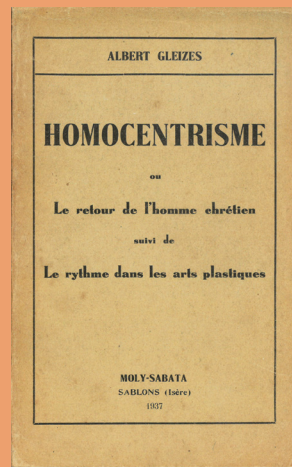
1947年には、1912年の初版にグレイズによる序文とメッツァンジェによる後書き、そしてキュビズムの画家11名のオリジナル版画を加えた新装版が刊行されました。



3. アルベール・グレイズ『絵画とその諸法則』パリ：ラ・ヴィエ・デ・レトル・エ・デザール、1924年
Gleizes, Albert. *La Peinture et Ses Lois: Ce qui Devait Sortir du Cubisme*. Paris: La Vie des Lettres et des Arts, 1924. 石橋財団アーティゾン美術館蔵

1918年、グレイズは滞在先のアメリカで宗教的な目覚めを経験し、キリスト教信仰や宗教画への関心を高めていきました。本書はルネサンス以前のキリスト教絵画を分析しながら、ルネサンスによってもたらされた一点透視図法による絵画空間を乗り越えることを探求した理論書です。本書でグレイズは、造形芸術における必須の2つの要素は「空間とリズム」であると説き、その2つは「拡張と運動」によってつくられると説明します。そして空間とリズムをもった作品をつくりあげる技法を「移動と回転」により図解しています。本書の執筆時期と近い1922年頃に描かれた『手袋をした女』にも、幾何学形態の集積によって生み出されたリズムが感じられます。

1931年、グレイズはフランス南東部の町サブロン・モリー=サバタという地に芸術家や文学者の共同体を創設しました。本書はそこで執筆された1冊です。書名の「オモサントリズム」は、ルネサンス以降の「ユマニスム」に先立つ、中世の概念を指します。ここでグレイズは、ルネサンスの画家ティツィアーノと中世の画家チマブーエの作品を比較しながら、「観察」することで外から世界を経験するルネサンスの画家ではなく、「理性」や「知性」によって内側から世界を経験する中世の画家に立ち戻るべきだと説きました。先に挙げた著書『絵画とその諸法則』と同様に彼はここでも、一点透視図法により自然や物の外見を写しとるのではなく、精神的かつ知的な内省によりイメージを練り上げていくことを理想としています。キュビズムや抽象表現によって、グレイズが造形活動を精神的かつ知的な活動にすることを希求したのだということが、本書から読み取れます。本書の後半には、「造形芸術におけるリズム」という別の論者があわせて収録されています。



4. アルベール・グレイズ『オモサントリズムあるいはキリスト教信仰者の帰還／造形芸術におけるリズム』サブロン：モリー=サバタ、1937年
Gleizes, Albert. *Homocentrisme ou le Retour de l'Homme Chrétien; (suivi de) Le Rythme dans les Arts Plastiques*. Sablons: Moly-Sabata, 1937. 石橋財団アーティゾン美術館蔵



5. ブレーズ・パスカル著、ジュヌヴィエーヴ・レヴィス編、アルベール・グレイズ挿絵『人間と神についての思索』カサブランカ：J. クライン・シゴニー出版、1950年
挿絵《理性と心情》
Pascal, Blaise, *Choix et classement de Geneviève Lewis, Gravures originales d'Albert Gleizes. Pensées sur l'Homme et Dieu*. Casablanca: J. Klein - Editions de la Cigogne, 1950. Illustration, *Raison et Cœur*. 石橋財団アーティゾン美術館蔵



参考図版：アルベール・グレイズ《レオナルド・ダ・ヴィンチ（フランス国立工芸院壁画下絵より）》1939-1940年、油彩・カンヴァス、299.7 x 125.7cm、マクネイ美術館蔵、ロバート・L.B.トビン寄贈
Albert Gleizes, *Leonardo da Vinci from Les Quatres Personnages Legendaires du Ciel*, 1939-1940. Oil on canvas, 299.7 x 125.7cm. Collection of the McNay Art Museum, Gift of Robert L. B. Tobin

本書は「人間は考える葦である」という有名な言葉を残した17世紀フランスの哲学者、ブレーズ・パスカルの選集にグレイズが版画を寄せた挿絵本です。モロッコのカサブランカに拠点を持ち美術系の出版を専門とするジャック・クラインによって企画されました。グレイズは1948年10月から1年以上かけて57点のエッチング作品を仕上げ、それらは画家が手がけた最後の版画作品となりました。その作業は非常に繊細で集中力と労力を要し、制作時、彼の右目は炎症を起こしたと言います。出来上がったものは、グレイズがこれまでの画家人生で描いてきたモチーフが寄せ集められた、いわば画業の集大成といえる1冊となりました。例えば『理性と心情』というタイトルの挿絵は、1937年に構想されたフランス国立工芸院（パリ3区）の講堂の壁画のために描いた、レオナルド・ダ・ヴィンチの姿図が下敷きになっています。壁画は実現しませんでした。いくつかの下絵が残されています（参考図版参照）。